

## 「春休み・青少年里山探検キャンプ」事業報告書



### 目次

1. NPO法人赤目の里山を育てる会について	2
1. 1 設立のきっかけと目的	2
1. 2 活動の実績	3
2. 本事業の基本情報	4
2. 1 事業の概要	4
2. 2 スケジュール	4
2. 3 参加者リスト	5
2. 4 スタッフリスト	5
2. 5 広報に用いたチラシ	6
3. 事業の様子	8
3. 1 事業内容	8
3. 2 参加者の感想	12
3. 3 日誌の記入状況	13
4. 本事業の目的と成果	14
4. 1 背景と目的	14
4. 2 成果	14
5. おわりに	15

事業実施期間 2007年3月25日(日)～3月27日(火)

主催 特定非営利活動法人 赤目の里山を育てる会

共催 国際ワークキャンプ2007 in 名張

後援 名張市教育委員会

## 1. NPO法人赤目の里山を育てる会について

### 1. 1 設立のきっかけと目的

日本における身近な自然「里山」は、1960年を契機にエネルギー転換のために、それまで薪炭に依存してきた燃料が、石油化石燃料に転換したために、経済的な価値を失ったエリアであった。そのため、不要となったその場所は、住宅需要やレジャー需要を実現するために、住宅開発や大規模娯楽施設などの開発が進んできた。しかし、それから30年、40年の経過の中で、大都市住民の中で、少なくなった身近な自然や豊かな自然環境に関心が集まり、またリラックスするための貴重な憩いの場所としての再評価が起こり、そのような場所を残していこう、活用していこうという取り組みが盛んになってきた。

このような中で、本会の前身の住民団体は、三重県名張市の南西部丘陵地で起こったゴルフ場開発のオルタナティブとしての「エコリゾート計画」を提案、実現して11年を迎える。この計画は、「エコリゾート赤目の森」という環境保全型宿泊施設を有限会社で作ったものである。50名位の宿泊できる小さな施設の一部に、本会が発足した7年前に、事務局を置き活動の中心をつくることのできた。

この「エコリゾート赤目の森」の建設実現の取り組みは、日本で初めて大規模開発へのオルタナティブ事業として注目を浴びた。なぜなら、それまでの環境保護運動においては、計画に「賛成」か「反対」しかなかった。そんな中で、こんな計画はどうか、という「対案」を突きつけて実現していったのだった。当時ゴルフ場を巡るいろいろな問題が「社会問題化」した時期で、ゴルフ場が抱えている問題を多くの人たちが認識し始めた時期であったが、それでも「ただ同然」の土地が「何倍にもなる」チャンスに里山の所有者たちは大きく期待した。それは、里山という山林を持っているといっても、面積はなほ少ない状況で、少ない面積でありながら維持管理する若い人が都会へ行ってしまう管理ができない、仮に山の木々を立派にしても採算が合わないなどの三重苦に苦しんでいる状況を狙った計画だったからであった。

このような状況で、簡単に「賛成」「反対」の二者択一の選択肢では、地域に無用な混乱と誤解を生じることになることを危惧した「ゴルフ場建設反対」の住民グループは、小さいながら「旅館業」が行える施設を建設し、そこで地元の人たちの雇用を生み出し、その施設を地元と大都市に住む人たちの交流の場として、「里山」という自然を大切に保全しながら、自らの健康と精神を「癒す」ことができるような「エコロジカル・リゾート」を作ろうという計画を提起して、短期間に実現したのであった。それが、1992年に完成開業した「エコリゾート赤目の森」である。

ゴルフ場計画はバブル崩壊と住民たちの反対運動、エコリゾート赤目の森建設運動などで93年に白紙となったが、「オルタナティブ」の取り組みは、事業を推し進めることが最も大切な重要であるのはもちろんだったが、利用者を獲得するのは反対運動を行なうより大変だった。それから、利用者をいかに獲得するのかということにまい進した「エコリゾート赤目の森」には、名前が知れて多くの利用者が訪れるようになった。温泉もない、何処にでもあるような自然ばかりしかない、そんな施設にそれなりの多くの人たちが来るようになった。

ほっとするようになった95年の春、またぞろこの里山に、産業廃棄物処理場の建設計画が発覚したのであった。突然斜面の木々たちの伐採が始まり、驚いた住民たちは、ことの真相を調べ、そのような計画があることを突き止めて、すぐに反対運動を組織したのであった。この取り組みには、エコ



リゾート赤目の森がある地区の人たちが熱心で、「産廃場はあかん」ということだった。

個人所有の土地をどのようにしようが、他人がどうのこうのとは言えない中で、全国では、イギリスで100年前に起こった「ナショナル・トラスト運動」が、注目され始めた時期だった。知床や天神崎、鎌倉などの取組みは、残したい自然や施設を、市民の一人ひとりの小さな浄財を集めて買い取る運動であった。この運動に学んで、赤目でも里山を残していこうということになったのであった。1996年2月、受身の環境保護では里山を守れないと土地の買取を会の大きな使命として、赤目の里山を育てる会が発足したのだった。

## 1. 2 活動の実績

30名くらいの人たちで発足した会は、大都市住民の支持を得て、すぐに200名を超える会へと成長し、次ぎの年には第一号の「ナショナル・トラスト・プロパティ」(トラスト地)を所有するまでになっていった。エコリゾート赤目の森近くの里山を賃貸して、トンボ池やトムソーヤ広場の建設、里道の整備、自然観察会、伐採木を使った「シイタケオーナー」の募集など、本会の取組みは全国のナショナル・トラスト団体との交流(1996年4月に社団法人日本ナショナル・トラスト協会団体加入)により、飛躍的な事業の展開となり、里山の整備が急速に進展したのだった。

1997年10月には、ナショナル・トラスト全国大会のエキスカッション会場になり、98年には「里山シンポジウム」開催、里山ガイドブック製作、地元赤目小学校の里山自然散策授業の開始、99年には三重県で第一号のNPO法人の認証を得て、行政との協働事業も始まった。2000年には、三重県の環境功労賞、2002年にはまちづくり賞を受賞した。2005年には里山の保全、希少種のカワバタモロコの保護育成に努めたことが評価されて、自然保護功労賞環境大臣表彰を受賞して、現在にいたっている。

また、里山の保全を進めるためには、一人でも多くの現場で頑張ってもらえる人たちを養成しながら、里山の自然の仕組みを理解してもらい、里山の意義や重要性、里山の心地よさを学んでもらうような講座をはじめることが重要だという認識になり、2000年の4月に初めて「里山保全人材養成講座」(基礎編)を開講した。翌年の2001年に「里山保全人材育成講座」(実践編)も開講したが、予想を超える20名以上の方々の受講希望があり、今日的ニーズをキャッチした瞬間だと大いに喜んだ。2002年には、学校の週休2日制が始まり、子どもたちの休みの時間を有効に活用する場を提案する必要と、男性だけでなく女性も里山について、勉強してもらう必要があるという認識と、実践編を勉強した人たちに、リーダーになって地域で頑張ってもらえるような講座の必要性から、それぞれ「子ども里山探検隊」「里山レディース講座」「里山リーダー養成講座」の三講座を開講し、多くの受講生を獲得して講座は行われていて現在に至っている。

また、2002年の12月には、三重県より介護保険法による通所介護サービス施設「デイサービス赤目の森」をエコリゾート赤目の森に併設して、里山の総合的な活用の一貫として、「癒し」の事業化も行うことになってきている。



## 2. 本事業の基本情報

### 2.1 事業の概要

#### 事業のねらい

都市部に在住する青少年に里山の生活を体験させ、森林の大切さとそこで育まれた日本文化に興味を持つきっかけとする。また次世代の森林保全を担う青少年の育成の場とする。

#### 事業の目的と波及効果

- ① 若い世代の森林や日本文化への興味の誘起
- ② 参加した青少年の今後の森林事業への参加
- ③ 企画・運営を通じた青少年リーダーの育成とその後の各地での活躍
- ④ 団体生活を通じた協調性と自主性をもった健全な青少年の育成
- ⑤ 幅広い年代間の青少年の交流によるコミュニケーション能力の向上

#### 参加者・ボランティア数

参加者	小学校2～6年生	20名
中学生ボランティア	5名（名張市内4名 市外1名）	
大学生ボランティア	12名	
一般ボランティア	1名	
その他スタッフ	4名	

#### 参加者募集の広報手段

- ・ 赤目の里山を育てる会 ウェブサイト
- ・ 名張市内の全ての小学校を訪問してチラシ配布依頼
- ・ 地元タウン誌への広告掲載
- ・ 大学生ボランティアによる赤目小学校での交流授業の実施

#### 報道

- ・ 地元ケーブルテレビ「アドバンスコープ」 <http://move.nava21.co.jp/shun/satoyamakyantu.wmv>

### 2.2 スケジュール

#### 1日目

10:30	近鉄赤目口駅集合
11:00	オリエンテーション・安全指導 里山散策
12:20	昼食
13:00	サバイバルツール作り ～16:00
18:00	夕食
18:30	入浴
21:30	就寝

#### 2日目

6:30	起床
6:45	ラジオ体操
8:00	朝食
9:30	奉仕活動（里山保全活動）

12:30	昼食
12:30	里山オリエンテーリング
16:50	入浴
18:20	夕食（石釜を使った料理）
19:00	キャンドルサービス
21:30	就寝

#### 3日目

6:30	起床
6:45	ラジオ体操
8:00	朝食
9:00	餅つき・草木染め
12:00	昼食
12:30	振り返り
15:00	近鉄赤目口駅解散

## 2. 3 参加者リスト

	氏名	ふりがな	年齢	性別	学校
1			9	男	百合が丘小学校3年
2			9	男	名張小学校3年
3			10	女	百合が丘小学校4年
4			10	男	小学校4年
5			12	女	箕曲小学校6年
6			9	男	百合が丘小学校
7			12	女	箕曲小学校6年
8			10	男	錦生小学校4年
9			10	女	蔵持小学校4年
10			12	女	箕曲小学校6年
11			9	女	蔵持小学校3年
12			8	男	小学校2年
13			10	男	滝之原小学校4年
14			9	女	百合が丘小学校3年
15			10	男	小学校4年
16			10	男	小学校4年
17			9	男	百合が丘小学校3年
18			9	女	百合が丘小学校4年
19			10	男	梅が丘小学校4年
20			12	男	小学校6年

## 2. 4 スタッフリスト

	氏名	ふりがな	職業	性別	所属
1			大学生	男	国際ワークキャンプ
2			大学生	男	国際ワークキャンプ
3			大学生	女	国際ワークキャンプ
4			大学生	男	国際ワークキャンプ
5			大学生	男	国際ワークキャンプ
6			大学生	女	国際ワークキャンプ
7			大学生	女	国際ワークキャンプ
8			大学生	女	国際ワークキャンプ
9			大学生	女	国際ワークキャンプ
10			大学生	男	国際ワークキャンプ
11			大学生	女	NICE 部分参加
12			大学生	女	NICE 部分参加
13			小学校教師	女	NICE 部分参加
14			中学生	女	中学2年生
15			中学生	男	中学2年生
16			中学生	男	中学2年生
17			中学生	男	中学2年生
18			中学生	男	中学1年生
19	河村正人	かわむら まさと	会社経営	男	自然体験活動講師
20	伊井野雄二	いいの ゆうじ	当会理事長	男	赤目の里山を育てる会
21	吉田薫	よしだ かおる	当会理事	女	赤目の里山を育てる会
22	佐野憲一郎	さの けんいちろう	当会理事	男	赤目の里山を育てる会

## 2. 5 広報に用いたチラシ

社団法人 国土緑化推進機構 平成18年度「緑と水の森林基金」助成事業

# 春休み 青少年里山探検キャンプ 参加者・ボランティア募集！

- 日時：2007年3月25日(日)～3月27日(火) 募集締切り:3月20日
- 参加者対象：小学3年生～6年生 定員20名
- ボランティア募集対象：中学生・高校生・大学生 15名
- 場所：三重県名張市上三谷 赤目地区の里山
- 参加費：6000円(2泊3日の食事・寝具代・活動費・傷害保険含む)  
ボランティアの滞在費用は赤目の里山を育てる会が負担するので無料です。
- 持ち物：初日の昼食用おにぎり、お米5合
- 目的：森林を活用した青少年の環境教育の促進
- お申し込み：裏面の参加申込書に記入し、郵便かファックスにて下記の連絡先まで

森の中でサバイバル道具作りや薪を使って生活してみよう！里山についても学べるよ。  
石窯でピザ作りや野外料理にもチャレンジ！  
思い出いっぱいの春休みにしよう！



### <このキャンプの特徴>

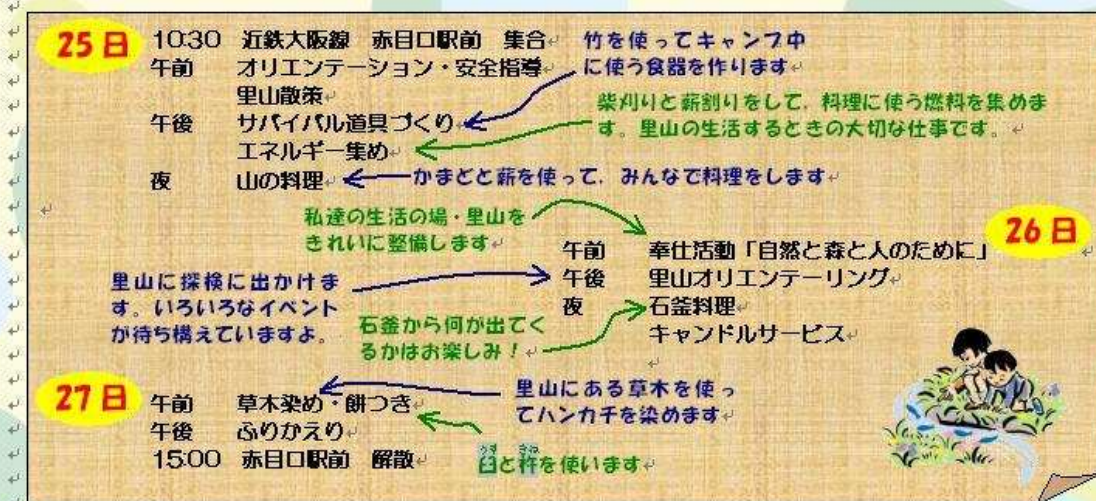
- ☆ 国際ワークキャンプの青年達と国際交流ができるよ
- ☆ 日本の暮らしの知恵や文化に触れる体験ができるよ
- ☆ 森林や環境問題についてもみんなで考え学べるよ
- ☆ 宿泊は和風ペンション、炭酸風呂などがあり快適だよ
- ☆ 季節感を自分の体全部使って感じる事ができるよ

★ フィールドは2005年環境大臣賞受賞の「里山」を活用して行います。  
全国からも視察があり、大学のゼミにも使われています。

主催：特定非営利活動法人 赤目の里山を育てる会  
共催：国際ワークキャンプ2007 in 名張  
後援：名張市教育委員会(予定)  
連絡先：〒518-0762 三重県名張市上三谷268-1  
電話：0595-64-0051 FAX：0595-63-4314  
HP：<http://akame-satoyama.org>

(表面)

キャンプ中のスケジュール (天候等により変更になる場合があります)



私たちがキャンプ中のサポートをします！



赤目の里山を育てる会 理事  
 青少年里山探検キャンプ  
 企画・運営担当  
 佐野 憲一朗  
 (東京工業大学)

(特)赤目の里山を育てる会は、名張市南部に残る里山を大規模開発から守り育てる活動を行っています。里山での絶滅危惧種の保護、赤目小学校と連携した自然体験授業等の活動が評価され、平成17年度自然環境功労者環境大臣表彰を受賞しました。全国を代表する里山保全団体の1つです。豊かな自然の残る里山での体験は、日本人の故郷を感じるかけがえのないものです。



国際ワークキャンプ 2007 in 名張 キャンプリーダー  
 岡田 健一  
 (東洋大学)

国際ワークキャンプは、国連 CCMS に加盟する NGO により、年間に世界およそ 3000 か所で行われているボランティア事業です。名張市では里山保全をテーマとして 1999 年より始まり、今年で通算 16 回目の開催となります。今回も、ドイツ、韓国を始めとした世界中から集まった国際色豊かな青年ボランティアたちが、里山探検キャンプの期間中、皆さんの生活をサポートします。

参加申込書

★すべて黒インク・黒ボールペンで記入、または「○」をつけてください。

氏名 (フリガナ)	女性 男性	生年月日
		19 年 月 日 (2007/3/25 で満 才)
保護者氏名 (フリガナ)	参加者との関係	
現住所 (フリガナ)	〒 _____	
電話	E-mail	
自宅 : FAX : 携帯 :	パソコン : ワードの添付ファイルが {読める・読めない} 携帯 :	
緊急連絡先 (現住所と同じ場合は不要)	電話	
〒 _____		
学校名・学年 :		
配慮が必要なもの (アレルギー、菜食、持病、身体的・精神的障害の有無など)		
〒 _____		

個人情報、ご本人の同意を得た場合または法令の定めがある場合を除き、第三者に提供することはありません。

(裏面)

### 3. 事業の様子

#### 3. 1 事業内容

- ・ ボランティアの到着と事前準備（前日）

事業の前日の午前中に、ボランティアが集合し、事業全体の最終確認と事前準備を行った。

- ・ オリエンテーション（1日目午前）

参加者が赤目の森に到着した後、全てのスタッフと参加者が一同に会し、グループ分け、スタッフ紹介、安全指導を行った。その後グループごとに分かれ、名札づくり、自己紹介、グループ名決め、アイスブレイクを行った。



- ・ サバイバルツール作り（1日目午後）

里山にある材料を用いて、生活に必要な道具を作ることができることを学ぶため、キャンプ中に使う箸とコップを自分たちで製作した。また、シュロの葉を用いて昆虫の制作も行った。



- 薪とかまどを使った炊飯（1日目夕方，2日目朝・夕方，3日目朝）

里山で採れたエネルギーである薪を調理に利用できることを実践するため，キャンプ中の4回の食事では，参加者自身で薪を使って炊飯を行った。

- 夕食の様子（1日目夜）

自分たちが炊飯した米をカレーライスにして食べた。自分の作った箸とコップも使っている。



- 日誌の記入（1日目夜，2日目夜，3日目昼）

その日に行ったプログラムの内容を，各自絵と文章でまとめた。参加者自身が，体験した内容を整理し書き留めておくのと，キャンプ生活での問題点をスタッフにフィードバックするのが目的である。

- ラジオ体操（1日目朝）

起床後，森の中に出て全員でラジオ体操を行った。

- 朝食の様子（1日目朝）

社会的に，子どもたちの朝食の乱れが指摘されているため，キャンプ中の朝食は，スタッフの調理による，旬の野菜と焼魚を中心とした日本食の朝食とした。この食事の炊飯も，薪を使い子どもたちが行った。魚の食べ方に苦戦している子どもも見られたが，ご飯をお代わりする子どもも見られた。



・ 奉仕活動「自然と森と人のために」（2日目午前）

まず、室内で紙芝居を用いて里山を保全する意義を学んだ後、クイズを行って里山と日本の自然に対する理解を深めた。その後、実際に里山に出て、薪割り、落ち葉かき、柴刈りの作業を行った。里山の保全と生活との関わりを、理論と実践の両面から理解させるのが目的であるため、それぞれの作業の前には、その作業の意義と注意点に対する指導を行った。

作業にゲーム性を持たせるため、各作業をチェックポイントに見立て、各作業を終えたときにキーワードを受け取るように工夫した。



・ 里山ハイキング（2日目午後）

赤目の里山の全域にチェックポイントを設け、班ごとに地図を渡してチェックポイントを回るようにハイキングを行った。各チェックポイントでは、自然観察や合唱、ネイチャーゲームなどの里山に関するイベントを設置し、イベントをこなすとキーワードを渡されるようにした。

年齢も体力も異なる子どもたちが、お互いのペースを思いやってハイキングをする姿が見られた。



・ 石窯料理（2日目夕方）

薪を用いて暖めた石窯を使い、夕食のハンバーグを焼き上げた。子どもたちと石窯を囲み、里山と人々の暮らしについて話し合いの場を持った。



・ キャンドルサービス（2日目夜）

火と人間の暮らしを考えることと、楽しい思い出づくりのため、キャンドルサービスを行った。火の受け渡しのセレモニー、ゲーム大会、キャンプの感想の共有の3部構成で行った。



・ 草木染めと餅つき（3日目午前）

里山で採れたそよごを用いて、ハンカチを染めた。また、前日に自分たちが割った薪を用いてもち米を蒸し、餅つきを行った。



### 3. 2 参加者の感想

毎日の活動の最後に日誌の記入を行った。その中から代表的な意見を抜粋する。

#### 感想

- ・ はじめて竹をつかって工作をしました。ケガをしないのかとしんぱいでしたけど、お兄さん、お姉さんがやさしくていねいにおしえてくれたので、安心してできました。
- ・ かわむらさんの矢のように葉をとばすあそびがとても面白かった
- ・ キャンドルサービスでみんなの絆が深まった
- ・ 山登りドキドキとワクワクでむねがいっぱい
- ・ ハイキングで、とてもつかれたけど、たのしかった。
- ・ むかしはこんな大へんなせいかつをしていたのかと思った。
- ・ 今日10この文字を見つけました。とちゅうに木がたおれていたりすべる道もあったのでアスレチックみたいでおもしろかったです
- ・ 朝ごはんが多いのが困った
- ・ クラスの友達となかよくできなかつたけど、たすけ合うということや、人の気持ちを考える、自ぜんのことにむきあうことをするのがすばらしいことだと思いました。これをしょう来にいかしたいです。
- ・ はいきんぐで低学年をかこんで歩いた
- ・ ハイキングでけわしい道をみんなでのりこえた
- ・ 自然も学べたし友達もいっぱいできてうれしかった
- ・ 朝にごはんをたいて大成功してうれしかったです
- ・ ハイキングの時道をまよったのでいけんをだしあった
- ・ 楽しかった
- ・ ここに来てとてもうれしかった。
- ・ ともだちがいっぱいできた
- ・ ごはんはうまかった
- ・ また行きたいと思った

#### 新しく発見したこと

- ・ 竹で何でもつくれる
- ・ かえるがとうみんしていた。とかげもいた。
- ・ 電気なしで生きれる。昔にはこんな物もあった
- ・ ごはんのたきかた
- ・ 昔は木や葉っぱでもやしたこと。
- ・ おちばはきをしていたらたくさんの虫がいた
- ・ たんけんで色が変わるはっぱをみつけた
- ・ 木木の中は空気きれい
- ・ トンボ池には生き物がいっぱいいる
- ・ 火に葉っぱがついたえだを入れるとパチパチなる
- ・ おちばにはいろんな色がある
- ・ 自ぜんのしくみがわかった

#### あなたの自然に対する考え

- ・ もっと大切にしたい
- ・ なんでも機械を使わなくてもなんでもできる
- ・ 空気をよごさないようにする。自ぜんは思ってたよりきれいだった。
- ・ たいせつにしないとだめ
- ・ 電気とかをつかうのは、今ではかんたんだけど、昔は自ぜん。
- ・ すきになった
- ・ しぜんはきれい
- ・ ポイすてをしているのでやめたい



## 4. 本事業の目的と成果

### 4. 1 背景と目的

里山と日本人の生活は、長い間非常に強い結びつきがあったが、現代の生活においてはほとんど結びつきが失われている。特に、近年の子どもたちは森林へ訪れる機会が失われている。日本の文化は森林との結びつきが強いものが多く、そういった文化を継承する機会も少ない。そのため、森林に対する関心を持つ機会も失われている。

一方で、都市型の生活になるに従い、地域の中での結びつきが弱まり、年代を越えた青少年の関わる機会が減っている。子どもたちの社会も学校が中心となり、同年代の者同士で関わる時間が圧倒的に長い。小学生と中学生、高校生や大学生が、同じ地域の中で互いにリードしながら活動する場所は、地域の中でみつけることは難しくなっている。

こうした中で、本事業は主に以下の5点を目的として行われた。

- ① 若い世代の森林や日本文化への興味の誘起
- ② 参加した青少年の今後の森林事業への参加
- ③ 企画・運営を通じた青少年リーダーの育成とその後の各地での活躍
- ④ 団体生活を通じた協調性と自主性をもった健全な青少年の育成
- ⑤ 幅広い年代間の青少年の交流によるコミュニケーション能力の向上

### 4. 2 成果

#### ① 若い世代の森林や日本文化への興味の誘起 に対して

子どもたちは里山を訪れ、慣れない環境や仲間の中ながらも、道具作りや保全活動、散策に熱心に取り組んでいた。電気を使わなくても炊飯ができる様子や、周囲に生えている竹や草木を用いて道具が作れることに対して、驚きと興味を示し、楽しそうに取り組んでいた。興味を持って取り組むか不安を抱きながらも、今回は里山保全活動の時間も取り入れたが、結局は我先にと熱心に活動に取り組む結果となった。感想文に新たな発見を書くようにしたところ、多くの発見の記載があり、好奇心を持って森林の中で活動に取り組んだことがわかる。最終日の感想からは、この3日間の活動を通じ、自然に対する興味が高まった様子が良く見て取れる結果となった。

また、ボランティアの青年達にとっても、里山を利用した生活を行うのは初めての者も多く、参加者と一緒に学ぶ様子が伺えた。

#### ② 参加した青少年の今後の森林事業への参加 に対して

この項目は、今後数十年のスパンでの評価が必要である。今回参加した青年ボランティアからは、今年の夏や来年の春に行われるボランティア事業への参加希望が出ており、既に成果を見て取れる。しかし、ボランティアとして以外の方法を上手く示すことはできておらず、具体的に今後どのように森林と関わっていく手段があるのかは、興味を持った青少年が各自で調べるのに委ねる状態である。

#### ③ 企画・運営を通じた青少年リーダーの育成とその後の各地での活躍 に対して

今回の企画は、青年ボランティアが中心となって行われた。細かな企画の内容を詰める部分、名張市内の小学校へ広報に回る部分など、どれも初めての経験であったものの、高い意欲を持って取り組んでもらうことができた。

キャンプ当日は、全体を見渡して指示を出す役割、子どもに常時張り付いて危険を回避する役割、食事や道具の準備など裏方で企画を支える役割に分かれて、各自が自分の担当をこなした。細かな指示を出さなくても、ボランティアが各自で考えて改善する場面が見られた。20人が参加したが、誰一人途中で抜けることなく3日間のキャンプを終えられたことは、ボランティアのチームワークと努力の結果だと思われる。

日本人参加者の数名は、今年の夏に、島根県や三重県などで、国際ワークキャンプのリーダーを希望しており、今後も各地で活躍することが期待される。

**④ 団体生活を通じた協調性と自主性をもった健全な青少年の育成 に対して**

キャンプ期間中は、なるべく他学年が混ざるように班を分けたが、上級生と下級生が協力する場面も見られた。共同生活は始めての子どももいたが、1日目が終わる頃には互いに打ち解けあい、特に大きな問題も無かったと思われる。親と離れた生活の中で、自主性も養われたと考える。

**⑤ 幅広い年代間の青少年の交流によるコミュニケーション能力の向上 に対して**

普段はあまり関わりあうことのないであろう、小学生と大学生が、非常によく打ち解けていた。また、ほとんどが初対面の子どもたち同士も、班活動では班の中で互いに協力している様子が見られた。途中で大学生ボランティアが疲れを感じていた場面もあったが、熱心に子どもと向き合っていた。

**5. おわりに**

本事業は、助成元の国土緑化推進機構を初めとし、国際ワークキャンプ 2007 in 名張の関係者、名張市教育委員会、NICE（日本国際ワークキャンプセンター）、その他大勢のボランティアの方々に支えられながら、無事大きな事故もなく開催することができました。ご協力誠にありがとうございました。なお、この事業に関するお問い合わせは以下へお願いします。

特定非営利活動法人 赤目の里山を育てる会  
〒518-0762 三重県名張市上三谷 2 6 8 - 1  
TEL 0595-64-0051 FAX 0595-63-4314  
E-mail office@akame-satoyama.org